

## ヤスパース哲学における「暗号解読」の意義

### 定 兼 範 明

世界定位、実存、照明、交わり、暗号解読、超越者、包括者等々は、全てヤスパース哲学を特色づける根本概念であり、又その多くは彼独自の思想を表現するために彼によって創始されたものであるが、われわれはこれらの中でも特に彼独特の概念である「暗号解読 (Chiffralesan)」を取り上げ、それがヤスパース哲学の中でいかなる意義を有するかについて考察したいと思う。

先ず一においては、ヤスパース哲学体系とそれにおいて暗号解読の占める位置の素描を、二においては、暗号の根本性格の考察を、三においては、暗号解読の主体としての実存の絶体的意識の考察を、更に四においては、暗号解読の基礎構造としての限界状況の経験の考察を試み、それら全体を通じて、暗号解読がヤスパース哲学の要石をなす中核的概念である事を明白にしたいと思う。

#### 一

「本来的なものを知りによって所有しようとする破壊しえぬ傾向がわれわれの中に存する」故に、分裂した個別的存在ではなくして「存在

そのものについての教説としての存在論」(III, s. 157)<sup>①</sup>の樹立は、歴史に現われた殆んど全ての哲学者の根本意図とするところであった。ヤスパース哲学を貫通する問題意識も又、この存在そのものの探究に外ならない。「本来的に存在するものは一体何か」(I, s. 22)という問は、ヤスパース哲学を終始一貫する根本的問である。

しかしヤスパースにおいては、伝統的な存在論的方法によって、存在そのものを把握することは不可能であり、「存在論は崩壊せざるをえない」(III, s. 160)とされる。ただし「存在論は本来的な存在を存在に関する知の中へ固定化し、」(III, s. 161)構成的な概念性の形式においてそれを認識しようとするが、存在そのものはこのような形式においては把握されえぬ限界無に他ならないからである。このような概念的思惟の超越的使用の不可能性を論じたのは、周知のようにカント哲学の最大功績の一つである。普遍妥当的な強制的知を可能にする主観的地平としての意識一般は、感性的所与の雑多を時間・空間の先天的直観形式を通して、概念的に綜合統一する機能であり、したがって感性的所与を欠く超越的存在(存在そのもの)については何ら認識を与え

えない。普遍妥当的認識の可能な領野は、对象的な経験界に限定される。超越的存在が開示される地平は、認識主観としての意識一般を超越した自由主体でなければならない。

キェルケゴール、ニイチェと並んで、ヤスパースが多大の影響をうけたカントのこの思想は、彼の存在論観を一貫し、彼の哲学の方法に決定的影響を与えている。存在そのものを知的に把握しようとする存在論においては、存在そのものの把握と对象的存在の把握との間の方法的区別が明確にされていない。知は世界内現存在に対してのみ可能という限界を有し、したがって知的对象的に存在そのものを求める努力は必然的に挫折せざるをえないにもかかわらず、存在論はこの限界を無視して知を存在そのものにまで拡大し、完結的体系としての存在知を提示しようとするのである。存在そのものを求める真なる哲学は、むしろこのような限界意識を明確にし、内在における挫折を通して超越しゆくものでなければならない。ヤスパース哲学の特色は挫折を通しての超越であり、その哲学的思惟は「私の存在意識を、変革するところの思惟」(I, S. VIII)であり、そこに用いられる概念は全て、この超越する体験を指示する超概念的信号 *signa* なのである。

「それ故に純粹な哲学的歩みは、方法的には超越することの諸様態として把握されるべきであり、」(I, S. 23)「哲学の超越することの諸様態は、それにおいて哲学が哲学の具体的内実を方法的に展開するために哲学自体の中で区別されるようになるところの原理となる。」(I, S. 44)存在そのものの探究は、いかなる存在をも看過しない公明な眼を必要とする。われわれが遭遇する全ての存在及びそれに遭遇するわ

れわれの存在が全て哲学的に解明され、わがものとされねばならない。差当って哲学は眼前的日常的存在の探究から出発し、このような存在の中に存在そのものを探す。挫折は必然的であり、より深い存在への超越が余儀なくされる。かくして哲学の歩みは、挫折を通しての超越の連続である。存在そのものとしての超越者はこのような一連の遂行道程がそれに向かって進んでいく究極の目標である。

ヤスパースはこのような超越することの諸様態に基づいて、彼の名著「哲学」を I 哲学的世界定位、II 実存照明、III 形而上学の三部に分けている。

哲学的世界定位における超越の中心は、カント的な意識一般への超越であるが、ここにおけるの根本意図は「諸限界につき当る」こと、そしてこの限界が知的概念的には踏みこえられぬ「原理的限界」であることを明確化する点にある。知は挫折し「そこに哲学的に超越することの可能性が開かれる。」(I, S. 5)具体的には人間存在の側においては、現存在、意識一般、精神の諸段階が、他方これに対応する内在的世界存在が、ここに究極的限界に到達し、実存及び超越者への超越が用意されるのである。

実存照明においては「この単独者としての単独者が、経験的個体性としての自己から、現存在における彼の存在の不可譲渡的な歴史的具体性における本来的自己としての自己へと超越する。」(I, S. 6)知的にはもはや処理すべき方途を見失った限界状況において、内在主観から単独者即ち本来的自己としての実存への超越が遂行されるのである。ここにおいて働く哲学的思惟は単なる概念的思惟ではない。それ

は意識一般を媒介としつつ、もはや意識一般によっては把握されえぬ内実を「信号」によって表現し、「可能的実存へ「訴えかけ」それを「覚醒させ」(I, s. 47) へつたすものがある。

「諸限界に直面して実存は意識の内存在性を突破する。」(I, s. 48) この意味で実存は超越的存在である。しかし実存は存在そのもの、超越者そのものではない。したがって「究極的な超越するはたらきはこの超越者を目ざす」(I, s. 49) ねばならない。しかし実存と超越者は本来それぞれ別個の他者である。実存と超越者との間には無限の開きがある。実存が自己を確信するような仕方では超越者は確信されない。超越者の存在が確信されるためには、「両者を結ぶ何らかの紐帯が必要である。即ち超越者の現象が実存に対して現在するのでなければならぬ。このような紐帯としての現象が暗号である。この暗号を解読することによって、実存は存在そのもの、超越者を確信するのである。これがヤスパースの形而上学に外ならない。

したがって「存在とは何か」という「哲学における止むことのない問」(III, s. 1) に導かれて今までに開示された「存在探究の諸様式は、「全て」「超越者への道」であり、「超越者の開明」であるこの「哲学的形而上学」(III, s. 3) において長い探究の旅は終る。哲学的形而上学こそは正にヤスパース哲学の究極の目標であり、哲学体系の核心である。そしてこの形而上学の内実の中心をなすものは、先述したように暗号解読によって超越者の存在を確信する点にある。暗号解読がヤスパース哲学の体系において占める重要性は自ら明白であるう。

## 二

ヤスパースの哲学的形而上学の中心は「自己存在による暗号解読」(III, s. 150) である。われわれはヤスパース独自の概念であるこの暗号について以下若干の考察を試みよう。

ヤスパースによると、「形而上学的対象性は暗号と称せられる。というのはそれはそれ自身としては超越者ではなくて、超越者の言葉だからである。それは言葉として意識一般によって理解されたり、或は又単に聞かれたりするのではなくて、言葉の様式とそれが話しかけるような様態とが可能的実存にとって存在する。」(III, s. 129) してこの言葉は三種に区別される。「第一の言葉」(III, s. 130) は「超越者の直接的言葉として、実存の絶対的意識にとってのみ現在する。言葉は単独者によって歴史的一回性の瞬間において聴取される。」この第一の言葉が一般化によって伝達可能となるとき「第二の言葉」となる。

「諸実存間での直観的伝達のかかる第二の言葉は、非交わりのと思われるものをかの根源から解き離し、そして物語、形象、人物、所作として翻譯しうる内容となすのである。」(III, s. 129) 更に第二の言葉である「この単に直観的な言葉へと最後に思想がむけられ、それを貫通してその根源に迫る場合には、思想は、認識不可能であるがしかし思惟において哲学的伝達の第三の言葉となるところのものを、形而上学的思弁の形式の中へと把握する。」(III, s. 130) 具体的には第一の言葉は自然、歴史、意識一般及び人間等であり、第二の言葉は特殊形態化された神話、彼岸の啓示、神話的現実、芸術等であり、第三の言葉は

思弁的言葉としての神学、形而上学の如きである。

さてこれら三種の言葉の中で最も根源的な意味において暗号と見做されるものは、云うまでもなく超越者の直接的言葉としての第一の言葉である。第二、第三の言葉は、この直接的な言葉が人間の手によって伝達可能な形態にまで再生されたものであり、第一の言葉が「存在の言葉」(III, s. 132)とあり、「存在の表情」(III, s. 142)とあるのに対して、間接的な「人間の言葉」(III, s. 132)「交わり、表情」(III, s. 142)にすぎない。したがって「超越者の現実性はやはり第一の言葉においてのみ決定的で」あり、「第二、第三の言葉の諸形態は、それが本来の意味を保持する場合は、根源的暗号を解読することに役立つのである。」(III, s. 141)したがってわれわれはこの根源的な暗号としての第一の言葉を中心にして論を進めたいと思う。

「暗号となりえないものは何も存在しない。」「全ての現存在するものは云わば人相学的に直観されうる。」(III, s. 168)とヤスパースは云う。自然、歴史、意識一般、人間等全て世界内的存在は超越者の言葉を語る暗号となる。しかるにこれらは全て哲学的世界定位において論明され、存在そのものとしての超越者には本質的に適合しないものとして、挫折的に超越せられたものであった。それらがここに再び回復せられて形而上学の中心概念たる暗号とされる。しかしこのことは決して世界的現存在がその世界内的意味のままに直ちに超越者の暗号となることを意味するものではなからう。暗号のもつ対象性を直ちに現存在の世界内的対象性と見ることは、哲学的世界定位、実存照明の意義を見失うこととなる。超越者は決して世界内現存在として客観的

に現象することはない。「暗号は超越者を現在へもたらす存在であるが、それによって超越者が客観存在としての存在となる」(III, s. 137)のではない。むしろ現存在が暗号となるということは、現存在が世界定位的意義を保持しつつ、更にその根柢において別の超越的意味を担うことを意味するのである。

このような思想の端緒を開いたのは周知のようにカントである。彼は意識一般によって構成される経験的対象界に対して、限界概念としての可想体を立てることによって、その現象性を論明したのであるが、元来現象とは何かが何かに対して現われることを意味する。現象界はそれ自体の中に存立の根柢を持つ自体存在ではない。したがって意識一般を超えた実践理性もしくは反省的判断力の立場からは、世界は道徳的な目的論的世界としての意味を有するに到るのである。内実はともかくとして基本的構造の点においてはヤスパースにおいても事態は同様である。「超越者の言葉は現存在において諸対象の第二の世界の如くである。」(III, s. 6)暗号は又象徴と云われるが、「象徴であるところの対象は、超越者の現存在的現実性として、確保されなくて、超越者の言葉としてのみ聞かれうる。現存在と象徴存在とは、意識一般もしくは可能的実存に対して示されるところの、一つの世界における二つの局面の如くである。」(III, s. 16)同一の現存在は、意識一般と実存に対しては異なった意味を持つ。一面においてそれは客観的对象性であると同時に、他面においては超越者の現象としての「形而上学的対象性」であり、「超越者を実存の意識において了解させる言葉の機能である。」しかしこれは同一世界の並列的二局面ではない。むしろ内在的对象性そのものが、その根柢から透明となり、超越的意味を担うこ

とを意味する。このような意味において形而上学的対象性としての暗号は「内在的超越者」(III, S. 136) なのである。

世界内現存在は実存の絶対的意識に対するときその表情を一変する。「あらゆる現存在は可能的象徴性に貫ぬかれている。私に現われるもの、私に行会う人、全て表情を持たぬものはない。」(III, S. 142) 現存在は今やその根柢から透明となり、「透き通ってみえるようになる。」(II, S. 282) 「世界は光明化」(III, S. 154) 我々に超越者の言葉語る。意識一般なる暗号についてヤスパースは云う、「現存在の中に秩序が、そしてこの秩序が存するといふ風に、現存在が存することは、その超越者の暗号である。この秩序はわれわれにとって最も自明的であり、あらゆる瞬間にそのいずれかの部分において現在し、また利用されるものである。われわれはこの秩序をその普遍性において意識するとき初めて眼を見る。その正当性は超越的真理の一つの暗号の如くであり、その妥当性の謎は超越者の存在の反映の如くである。どの正当性も真理として光輝を放つ。それは単にそれ自身ではなく、それを可能ならしめるものがその中に輝いているように見える」(III, S. 184f.) 云。

ここにわれわれはヤスパース哲学の一つの特色を見る。ヤスパースは自己の哲学を明確に実存哲学と規定するのであるが、この実存なる概念が、哲学史における *essentia* と *existentia* との古くからの区別に由来することは周知の事柄である。この場合 *essentia* とは「或るものが何であるか (Was etwas ist)」即ち存在者の本質を意味する。これに対して *existentia* とは「或るものが存在するということ

(daß etwas ist)」即ち存在者が、そこに、ある (Dasein) ことを意味する。③したがって *essentia* に重点をおく哲学が存在者の本質を求めて観念論的傾向をとるのに対して、実存哲学は現存在としての存在者の実在性から瞬時も目を放さぬことを特色とする。もともとこの実在性が単に日常的世界内の意味にとられるのではなくて、実存的体験をも含めての人間の現実性の意味にとらねばならぬことは実存哲学において当然のことであろう。このような精神は又ヤスパース哲学を一貫している。今われわれは超越者への接近の唯一の方途としての暗号が実は世界内の現存在に外ならぬことを見てきた。このことはヤスパースにおける哲学の方法である「超越すること」が決して単に世界を超出していくことではなくて、実は内在的世界をその根柢から基礎づけ包摂するものであることを意味している。世界を越えることは世界を放棄することではない。ヤスパースにおいて超越者の把握は実存が無世界的に超越者と合一する「神秘的合一 *unio mystica*」(II, S. 280) において実現されるのではない。超越者との神秘的な無世界的合一が究極的であるならば、科学的探究や倫理的実践の意味は失われ、出世間的隠棲の生活が最高の生活となる。しかしヤスパースにおいては超越することは超越されるものを包摂し、根源からそれを回復することの意味する。したがって世界内の現存在や実践は、超越することによってその根源的深き意味を獲得するのである。

われわれは暗号の意味を開明しつつ、形而上学において世界定位的現存在の占める意義を一面的ではあるが明らかにした。しかしこのよ

うなヤスパース哲学の構造の深き意味は、暗号解読の主体である実存の根源的体験の開明において初めて明白となるであろう。

## 三

われわれは二において、世界内現存在が透明となり、超越者の言葉を語る暗号とすることを見た。しかしこの語るということは日常的意味における現実ではなく、誰でもそれを聴取しうるものではない。我々が単に世界内的な現存在、意識一般、精神である限り、対象的現存在は透明となることもなく、語りかけもしない。現存在が超越者の暗号となり、その言葉が聞かれ解読されるためには、われわれの眼が開け、それを聞く耳が用意されねばならない。このような主体的地平としてヤスパースは「暗号解読の場所としての実存」について語る。

「世界の現実性が知覚されるためには感覚器官が無瑕でなければならぬように、超越者に出会われるためには可能的実存の自己存在が現在していないなければならない。私が実存的に誓であるならば、対象において超越者の言葉は聞かれえない。」(III, S. 150) 内在的主観が自己存在へと超越し実存となるにつれて、現存在は透明化し暗号となる。超越者の直接的言葉は実存の絶対的意識に対してのみ現在のであり、解読されるのである。

この直接的言葉を解読することを、ヤスパースは「形而上学的経験」と呼ぶ。それは「認識、思惟、感情移入」(III, S. 130)の何れでもなく、もはや客観的には確認しえぬ実存の根源的な超越的体験である。このような体験の中核的機能は「実存的瞑想」と名づけられる。

それは暗号を解読する「可能的実存の目」としての「空想 Phantasie」に外ならない。「私は世界定位においては、現存在を諸概念によって認識する。しかし私は存在を現存在において、ただ空想によってのみ解読する」(III, S. 152)のひびく。この空想がもはや人間の単なる心理作用としての心理学的意味におけるものではないことは論をまたない。それは日常的な世界内的主観性を越えた実存的意味におけるものとしての「哲学的空想」(III, S. 152)であり「実存的空想」(III, S. 153)なのである。

この空想をヤスパースは「実存照明」においても、「充実せる絶対的意識」の分枝として開明している。限界状況に直面して挫折した可能的実存は、「根源における運動」としての「無知」「目まいと戦慄」「不安」「良心」を通して、「充実せる絶対的意識」に到り、自己存在を確信するのであるが、(II, S. 261ff.)この充実せる絶対的意識は「愛として開明される。愛は能動的には信仰であり、そして無制約的行動に到る。愛は瞑想的には空想となり、そして形而上学的呼出しとなる。愛から生ずるものは分離されえぬ相関関係に立つのである。」(II, S. 270)このような愛、信仰、空想の三位一体的な絶対的意識は、「個人的な現存在現実性」としての「体験としての意識」、「知る諸主観に対するあらゆる対象性の普遍的制約」としての「意識一般」から明確に区別されるべき「実存の存在確信」(II, S. 265)に外ならない。確信とは知による対象的或は概念的な把握でないことを意味する。それは存在の Was の知ではなく、存在の Das の確信である。

さてこの存在確信における存在とは、差当たっての実存照明において

は、実存の自己存在の意に解さねばならぬであろう。「意識が対象ではなくして、対象の知であるように、絶対的意識は実存の存在ではなくて、実存の確信であり、本来の現実性ではなくて、その反映である。実存は現存在において存在を覚知する可能性たる云わば待つ意識の充実によって自らを確信するのである。」(III, s. 257) ここにおいては実存の存在とその意識は明確に区別されている。実存の存在は意識においては反映しつくされぬ人間の全体的深みであり、意識を担う当体である。しかし反面実存はそれが実存になるためには、このような反映的意識を不可欠とし、それを欠けば盲目となって真の自己を実現しえない。絶対的意識の充実において実存は自己を確信し、真の実存となる。このことは絶対的意識の照明が実存照明の中に位置づけられていることに対応している。ただし実存照明とは可能的実存が実存として現成していく道程の照明であり、究極は実存が自己を確信し真の実存となることにあるからである。

しかし存在確信の存在をこのように自己存在の意味に限定することはヤスパースの真意に沿うものではなからうし、又そうすることによっては形而上学における暗号解読の機能としての空想が、絶対的意識の分枝とされている深き意味が見失われることになる。絶対的意識とは何らかの意味において、超越者に関わる意識であり、絶対的意識の存在確信とは、超越者の存在を確信することではなかなければなるまい。絶対的意識の存在確信とは自己存在の確信ではなくて、超越者の確信である。否むしろヤスパースにおいては、自己存在の確信と超越者の確信とは、同時的瞬間において現成するものである。暗号を解読しう

るものは実存のみであった。「私が自己となるそれだけのものを、私は超越者から聴取する」(III, s. 150) のである。しかしこのことは又逆に、実存は暗号を解読することによって真の実存となると云い換えられよう。「空想は実存の、実現に対する、積極的な制約である。可能的なものの空間としての空想なしには、実存は単なる現存在現実性の狭隘さに束縛されたままになっている」(II, s. 282) のである。したがって「実存とは自己自身へ関わり、且そうすることのうちでその超越者に関わるところのものである。」(I, s. 15) 自己に関わる自己確信と超越者に関わる超越者の確信とは、同一体験の異なった表現に外ならないのである。

しかしこの内面的関連のより深い究明は、実存の根源的体験としての限界状況の経験を開明することによって初めて可能である。

#### 四

可能的実存が自己存在へと超越的に自己を深める機縁となるものは、周知のようにヤスパースによって「限界状況」と名づけられる。ヤスパースにおいて「状況」とは「単に自然法則的な現実性ではなくて、むしろ精神的でも物質的でもなく、私の現存在にとって利或は害を、機会或は制限を意味する具体的現実性として、同時に物質的でも精神的でもあるところの意味、関係的、現実性」(II, s. 202) である。それは時間的に変動するもの、又われわれの技術的、法律的、政治的行為によって変更しうるものであり、或る意味においては「われわれは状況を創造」(II, s. 202) しているのである。これに対して「私が常に

状況内にあり、「闘争と苦悩なしには生きてゆけず」、「不可避免的に責を担い」、「死ななければならぬ」というような状況は、人間の現存在に固有なものとして、その現われる様相は変化するとしても、それ自体は変化しないものである。これがヤスパースの云う限界状況である。「限界状況は概観されえない。」「それは云わばわれわれがそれに衝き当たって挫折する壁の如くである。われわれはそれを変化させえなくて、唯明白化しうるだけであるが、それも他者から明白化し、導出しうるのではない。それは現存在と共にある。」(II, s. 203) 限界状況は意識一般によって見通すこともできず、実践的行為によって変化させることもできず、云わば内在的主観によっては突破されえぬ鉄壁である。

このような限界状況としてヤスパースの示すものは「実存の歴史的規定性としての限界状況、『個別的限界状況(死、苦悩、闘争、責)』及び「全ての現存在が疑わしいという限界状況と現実的なもの一般の歴史性という限界状況」(II, s. 210ff.)であるが、これらの根本特徴をなすものは歴史性の概念であると云ってよからう。われわれは特に歴史的規定性を中心にして以下論を進めたいと思う。

「第一の限界状況」は「私が現存在として常に一つの規定された状況内に存する」ということである。「私はこの社会的状態におけるこの歴史学的時間においてあり、男性或は女性であり、青年或は老年であり、或る機会と便宜によって導かれている。」(II, s. 209) 私の現存在は真に狭い。今—此処にかくかくというこの個人の一回的現実性は、狭隘な牢獄の規定性である。又「私は私の両親を選択して決定し

たのではない。」(II, s. 215) 私の由来は運命的な端緒の規定性である。更にこのような規定性は個別的限界状況において集中的に白熱化したものとなる。われわれは今それに立入る余裕を持たないが、結局歴史の規定性とは、人間が自分で選択したのでない状況、普遍的法則によっては解釈しえぬ一回限りの特殊性を持つ状況の中に投げ込まれていること、したがってそれがもはや現存在の力によっては打破しえぬ限界であることを意味する。それは被投性としての人間の有限性の表現である。

ところでヤスパースによれば、限界状況はもはや意識一般に対する状況ではない。「知的な目的的行為するものとしての意識は、唯状況を客観的にのみ捉えるか、或はそれを回避し無視し忘却するかである。」(II, s. 203) それは常に限界の内部にのみ留っていて、この限界そのものに直面する力を持っていない。「諸状況が内在的意識に属するように、限界状況は実存に属する。」(II, s. 203) 限界状況を限界状況として正視し経験しうるのは、意識としての現存在が自己存在へと超越し実存となることによって初めて可能なのである。このことは逆に又限界状況を経験することにおいて、実存への超越が現成することの意味しよう。この超越は差当っては、「規定されたもの、偶然的なもの、他様にもありうるものが、自由に私に属するものとして引受けられるか、或はこの現実性を引受ける可能性が拒否されるか、」(II, s. 214) 又「私の現存在の規定性を私自身のものとなすか、或は拒絶するか」(II, s. 215) の二者択一的決断の瞬間である。それは先述した「根源における運動」として展開する。そして結局このような

限界状況、即ち私の現存在の歴史的規定性は、私のものとして決断的に引受けられる。この引受けによって限界状況の経験が成立し、実存への超越が現成する。故に「限界状況を経験することと実存することとは同一なのである。」(II, s. 204)

しかし更にヤスパースにおいては、「限界は或る他者の存在することを表現して」(II, s. 203) おり、「限界の本来的機能」は「まだ内在的であるが既に超越者を指示する」(II, s. 204) 点にあるとされる。

それに面して挫折すべき鉄壁としての限界は、その鉄壁の背後に超越的にはあるが或る他者、即ち超越者の存することを指示する。それはもとより現存在の意識にとつては無であるが、しかし限界状況を経験する実存にとつては無ではない。現存在の歴史的規定性を自己のものとして引受けるとは、この歴史的規定性という限界の背後なる隠れた手を感じすることを意味する。即ち超越者の存在を確信するのである。「実存はその規定性 (Bestimmtheit) の限界状況内において、その使命 (Bestimmung) の決断へと召喚され、」<sup>1)</sup>「それ自身の根拠の深みにおいて安らいを見出すのである。」(II, s. 211) 実存の歴史的規定性とは実存の有限性の表現であった。したがって限界状況を経験することとは、この有限性を有限性として決断的に引受けらるることであった。しかしこのような有限性の意識は、限界を超えたものを指示し、その反映である。「超越者に眼を向けるとき、実存は有限性の本来的意識を持つ。」(III, s. 5) 限界状況においてぎりぎりの線まで尖鋭化する有限性意識は、実は又超越者の意識であり、究極的な存在確信に外ならない。

さて暗号解読の主体は実存であり、超越者の言葉は「実存の絶対的意識にとつてのみ現在する。言葉は単独者によって歴史的一回性の瞬間において聴取される」(III, s. 129) のであった。単独者とは実存であり、歴史的一回性の瞬間とは正に内在的時間が永遠と結合する瞬間であり、実存が自己の限界状況を揮身の力をもって誠実に引受ける瞬間のことである。この瞬間に実存は絶対的意識として現成し、実存的瞑想としての空想が開眼する。われわれは今迄限界状況の歴史的規定性を論じながら、それを曖昧な意味において用いて来たが、ヤスパースにおいて歴史性とは「時間と永遠性との統一、」<sup>2)</sup>即ち時間内現存在が単にそれに留ることなく、永遠者の存在を指示することを意味する。そしてかかる「時間性と無時間性との同一性としての瞬間は、事実的瞬間の永遠の現在への深化である。」(II, s. 126) したがって空想が開眼する瞬間とは正にこの永遠の現在であり、限界状況の諸規定が歴史的なものとして、超越者の暗号となる瞬間に外ならない。暗号とは限界状況の別名である。このことはヤスパースが、二においてわれわれの考察した暗号の諸様態の後に、「超越者の決定的暗号」としての「挫折における存在」(III, s. 219) を語ることによつても明白である。したがって限界状況の経験は又暗号を解読することによる超越者の確信なのである。

限界状況は、疾風怒濤の状況である。人間を根柢から揺さぶり、無の深淵の只中に立たせる。そこにおいては自己の現存在の諸規定性を自己のものとして引受けるか否かの二者択一的決断が要求される。引

受ける決断は「根源における運動」として展開する。しかしそれは同時に又超越者を確信するか否かの決断を迫られる瞬間である。確信する決断は「形而上学」における「超越者への実存的関係」として展開する。それは「反抗と帰依」、「没落と高揚」、「昼の法則と夜への熱情」、「多者の豊富と一者」(III, S. 68ff.)である。又「根源における運動」は「充実せる絶体的意識」において完成する。それは自己存在が確信される瞬間である。しかしそれは同時に限界状況的諸規定が暗号となり、その解説において超越者が確信される瞬間である。したがってヤスパースにおいては実存照明と暗号解説とは、相互依存的相互制約的關係にある。否むしろこの両者は厳密な内的意味においては同一の根源的体験の異なった表現に外ならないのである。

以上簡略ながらヤスパース哲学体系を構成する哲学的世界定位、実存照明、形而上学の内的連関構造を明らかにした。世界内現存在はその原理的境界に直面し挫折することによって、却ってその内在的対象性は根柢から透明化し、超越の意味を担う暗号となった。この透明化の主體的基盤は、実存照明における実存の限界状況経験であり、限界諸規定性の直視的引受けである。この歴史的一回的引受けの決断において実存は真の実存となり、自己存在を確信するが、このような存在確信は暗号解説の機能としての空想によってのみ充実し現成するのである。暗号を解説することは実存することである。暗号解説は「現存在と実存との内的統一」であり、現存在と超越者との内的統一である。かかるものとして実存は超越者の前に立ちその存在を確信する。

ここにおいて暗号解説がヤスパース哲学において占める位置は自ら明白であろう。特にヤスパース哲学の究極目標が存在そのものとしての超越者の深究にあることを思うとき、暗号解説の意義は正に決定的である。

註

- ① K. Jaspers: Philosophie, 3 Auflage, 1956 以下の引用は全て巻数と頁数のみを挙げる。
- ② ヤスパースにおいては、現存在(Dasein)は種々の意味に用いられる。それは自然としての物質、生命、靈魂及び人間としての精神を総括する場合もあれば、この精神としての人間が現存在、意識一般、精神に分けられる場合もある。われわれも以下これらを厳密には区別せずに用いる。
- ③ O. F. Bollnow: Existenzphilosophie, 5 Auflage, 1960, S. 19